

研究主題「児童一人一人の『深い学び』を実現する社会科学習

－効果的な資料活用に向けた視点のもたせ方－

東京都教職員研修センター企画部企画課
葛飾区立柴又小学校 主任教諭 四ツ目 理恵

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）（以下、「新学習指導要領」と表記。）では、「主体的・対話的で深い学び」が実現するよう授業改善等を図ることが示された。そして、「深い学び」に関しては、「各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう力」とされている。

この力を育むためには、児童一人一人の学習に対する意欲を高める指導の工夫や、学習の課題に対して粘り強く取り組む児童の主体性を育てていくことが必要である。また、対話的な活動を通して様々な考えや事実等に触れることや、「見方・考え方」を働かせて、自己の考えや社会的事象の意味、意義を捉える学習活動の充実を図ることも必要である。だが、以前参観した社会科の授業では、提示した資料の読み取りにのみ時間をかけており、社会的事象の見方・考え方を働かせて思考する時間が少なかった。授業で使用する資料は、社会的事象への気付きや問いをもたせ、考えや意見を表現する根拠として活用する重要な教材である。よって、単元全体を通して学習の効果が高まるような資料の活用方法を教師自身もつことが重要であると考えた。

これらのことから、本研究では授業で扱う資料活用の工夫を通して「深い学び」の実現を目指す。「深い学び」の実現により自己の考えを深め、これまで学んだ知識・技能を生かし、社会との関わりを意識して学習の問題を追究・解決する児童の育成と、効果的な資料活用の視点をもたせる社会科学習の授業づくりに迫る。

第2 研究仮説

資料活用の視点を単元に位置付け、社会的事象の見方・考え方を働かせるような発問や資料の提示方法の工夫を行うことで、児童一人一人が社会との関わりを意識して学習の問題を追究・解決することができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 「主体的・対話的で深い学び」について

新学習指導要領では、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下、見方・考え方と表記。）が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ることが大事であるとされている。また、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」はそれぞれ単独ではなく、教科横断的な視点や単元全体や内容のまとまりを通して実現を図りながら、児童の資質・能力を育む効果的な指導を目指すことが必要である。これらのことから、単元全体を通して「深い学び」が実現するよう、効果的な資料活用に向け

た指導の充実を考えていく必要がある。

(2) 資料の活用能力について

資料は種類によって特性が異なるものであることから、教師はその特性を理解した上で準備、提示、使い分け等を行うことが大切である。また、児童の資料の活用能力を育成するためには、既存の資料の収集、選択、読み取り、分析等を経験させることも重要である。

2 調査研究

(1) 調査の概要

平成 29 年 8 月に都内公立小学校 7 校の第 5 学年の児童を対象に、社会科学習に関する実態及び意識について、教師を対象に社会科の学習指導の実態等について、それぞれ質問紙法により調査を実施した。

(2) 児童対象の調査結果（回答 529 名）

児童対象の調査結果のうち、「資料をどうい
 うときに使いますか。」という質問から、上位
 2 項目を見ると、概ね児童は資料を調べる手
 段として活用していることが分かる（表 1）。
 しかし、「人に伝える場面や比較・関連付けて
 考える場面」と答えた児童は 5%、「書くとき、
 まとめるとき」と答えた児童が 3%であるこ
 とから、資料活用の有効性に関する指導を更
 に充実させる必要があると考えた。

表 1 児童アンケートより抜粋
 「資料をどういうときに使いますか」（n=529）

資料を使う理由	割合
調べるとき	47%
分からないとき・不思議に思ったとき	38%
人に説明するとき・伝えるとき	5%
比較するとき・考えるとき	5%
書くとき（ノート・新聞・リーフレット）、まとめるとき	3%

※自由記述による回答のうち多かった項目を集計

(3) 教師対象の調査結果（回答 45 名）

教師を対象として行った調査研究のうち、
 「社会科の資料をどういう意図で使わせてい
 ますか。」という質問に対し、上位 2 項目を見
 ると、資料を基に児童の興味・関心を高める
 指導の充実ができていると感じている教師が
 多いことが分かる（表 2）。

表 2 教師アンケートより抜粋
 「社会科の資料を、どういう意図で使わせて
 いますか」（n=45）

回答	割合
学習問題に対する根拠をつかませるために活用する。	50%
児童の気付きや疑問を引き出すために活用する。	48%
問題解決や疑問を見付けさせるために活用する。	3%

また、自由記述の部分では「児童の興味・
 関心を高めるため資料を工夫することや発問
 を吟味する必要があることを理解しているが、
 教材研究の時間がつけれない。」という記述や、

「工夫をしたいが取扱時間の関係もあり、教科書に合わせて授業を進めることが精一杯である。」
 という記述も見られた。

この調査結果から、児童が自ら進んで課題に関わりながら社会的事象の意味や意義を捉える
 学習活動の充実が大切であることは理解されているが、実践をしていく上での課題点も多いこ
 とが分かった。

3 開発研究

(1) 新学習指導要領における「育成すべき資質・能力の三つの柱」を基に考えた単元構成

社会科の各学年の目標には、社会的事象の見方・考え方を働かせて資質・能力の育成を目指

すことが示された。このことから、社会的事象に対する見方・考え方を働かせるために、効果的な資料活用を単元に位置付ける必要があると考え、学習指導案と資料活用の視点や意図が確認できる学習指導案を開発した。また、作成時に留意する点として「育成すべき資質・能力の三つの柱」に基づいた授業改善の視点を基に単元構成を計画した。

(2) 資料活用の視点から考えた「深い学び」を実現するための学習展開

児童が社会的事象の見方・考え方を働かせて思考・判断し、表現するためには、単元を通して育てたい児童像を明確にすること、「位置・空間」、「時間・時期」、「相互関係」に基づいて効果的な資料の精選及び提示を行い、児童が学習の問題に対して問いをもつような指導の充実が必要である。授業で扱う資料を基に、児童が社会的事象の見方・考え方を働かせた思考・判断・表現が可能となるよう、資料活用の意図を具体化させていくための学習展開例を開発した（図1）。

「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた授業デザインは、授業改善をしていくための視点となる。図1の学習展開例は、社会科の学習過程である、課題を把握する「導入」、課題の解決に向かう「展開」、考えをまとめ、生かしていく「まとめ」の段階で、資料活用の意図を視覚的に明確化できるようにした。そして、「深い学び」を実現させるための要素として、資料を「位置・空間」、「時間・時期」、「相互関係」の視点で精選・提示を行った。

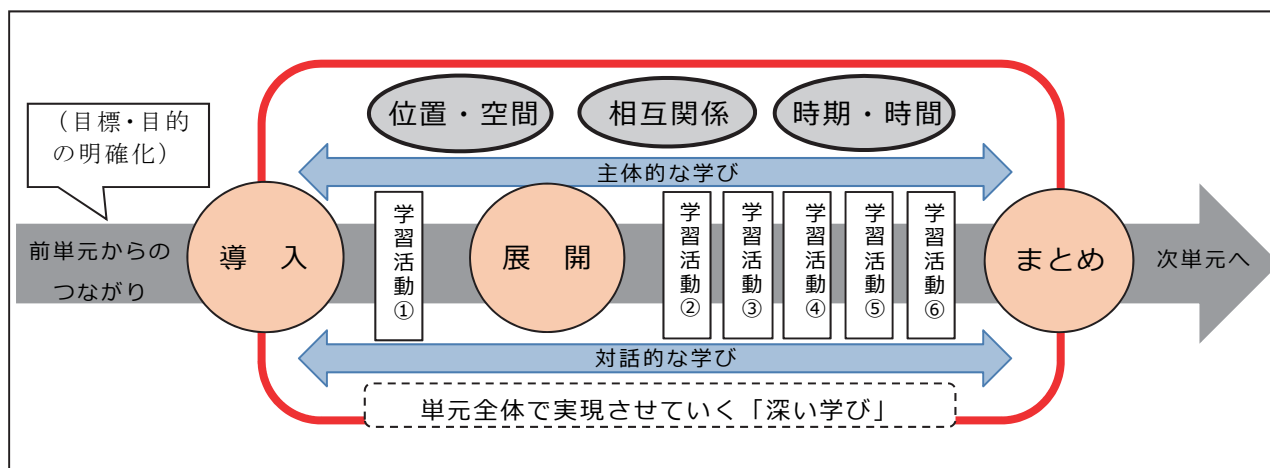


図1 資料活用の意図を具体化した学習展開例

4 検証授業

(1) 検証授業の概要（平成29年9月・10月実施）

都内公立小学校第5学年を対象に、社会科「自動車づくりにはげむ人々」（全9時間）の検証授業を実施した。

(2) 「資料活用の視点を位置付けた学習展開例」の有効性の検証

「三つの資質・能力」を基に授業の在り方を考え、検証授業を行った。その際、開発した図1の「資料活用の視点を位置付けた学習展開例」を基に、1時間ごとに活用する資料を「位置・空間」、「時間・時期」、「相互関係」のいずれかの視点で精選し、資料を生かすための発問・板書を考え、実践を行った。資料を基に問題解決的な学習を進めることで単元全体を通して児童は自ら進んで学ぼうとする意欲が持続し、授業の振り返りでは「なぜだろう」、「調べてみたい」という記述が多くなった。

児童が資料を基に思考・判断する場面では、個人で考えを深める時間を設定し、自分の考え

を明確化させ、三人一組で行った話し合い活動によって意見や考えを広げる学習を実施した。児童が思考・判断する場面においても、思考のプロセスを大事にし、意見交流の場面等も意図的に計画して実施した。振り返りでは、「最初、問題は□□だと思った。だけど友達の前々という考えを聞いて、□□の問題と■■の問題、両方が関係していることが分かった。」等の記述が見られ、児童の思考も柔軟に変化してきたことが分かった。

(3) 検証授業の分析(第3時・第8時)

第3時では、自動車工場全体の航空写真を中心資料とした。複数の資料を比較・関連付けるような提示の工夫を行った結果、学習に対する主体的な姿勢が見られる記述を書く児童が増えた(表3)。第3時において児童Aは、提示した資料を基に工場の大さや自動車のつくり方に興味を示し、次時の学習に対する意欲の表れを示しているが、第8時では、これまで学んだことを生かし、工場で働く人々の工夫や努力に目を向ける意見を記述している。児童Aのように、社会的事象の見方・考え方を働かせ、生活経験と既習の内容から新たな問いもつ児童や、これまで学んだ知識と関連付けて思考をする児童が増え、学級の80%の児童の発言・振り返り等に変化が見られる結果となった。

表3 児童Aの振り返り(第3時・第8時)

(第3時)

工場の大さが、〇〇駅から△△の駅までであると聞いて、とても驚いた。どうしてこんなに大きな工場をつくる必要があるのか調べてみたいし、大きな工場で何人くらいの人が働いて、どうやって一気にたくさんの自動車をつくれるのが気になる。

↓

(第8時)

船やキャリアカーは、長所や短所を考えて使い分けられていることが分かった。もし道路が混んで遅れてしまっても大丈夫なように時間によゆうをもって運んでいるのかな。そうだとしたら、時間の管理や、自動車の生産台数の管理など、いろいろなことを気にして、自動車をつくる人々みんなで協力をしているのだと思う。

※下線部は、児童の社会的事象に対する興味・関心の変化や、理解したことをまとめている様子を示している。

(4) 児童の分析結果及び振り返りの分析結果

単元全体を通してねらいを明確にし、資料の精選及び提示の工夫等を行ったことで、児童の学習に対する主体性を持続させることができた。また、社会的事象の見方・考え方を働かせて思考をしたり、自分の考えを記述したりする児童が学級の80%に増えた。さらに、対象学級による事後調査において83%の児童が「社会科で学んだことは将来に生かせる」と考えていることから、社会的事象の意味や意義を捉え、思考・判断し、表現できる児童の育成を目指していくことが重要であることを再確認した。

第4 研究の成果

- ・ 単元を通して社会的事象の見方・考え方を働かせることで児童の思考も変化し、振り返りの内容や話し合い活動の発言等に変化が見られた。
- ・ 「深い学び」を実現させていくための単元構成の工夫や、資料の精選及び提示に関する視点を定めたことで、資料を基に単元を計画する教材開発が有効であることが確認できた。

第5 今後の課題

- ・ 開発物の改善を行うとともに有効性を追究し、研究成果の普及・啓発を図る。
- ・ 他の学習単元においても本研究の手だてを活用し、検証していく。